HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	石油時代のアラスカ先住民社会 ： 自然・人・産業
Author(s)	近藤, 祉秋
Citation	寒地技術論文・報告集 寒地技術シンポジウム, 33, 18-23
Issue Date	2017
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72850
Type	journal article
File Information	Alaska Natives in Petroleum Age.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

COLD REGION TECHNOLOGY CONFERENCE 2017

石油時代のアラスカ先住民社会：自然・人・産業

Alaska Natives in Petroleum Age: Nature, Humans and Industries

近藤祉秋 [1]
Shiaki Kondo[1]

[1] 北海道大学
[1]Hokkaido University

1. はじめに

本稿では、1970 年代以降、石油への依存を高めるアメリカ合衆国アラスカ州において、先住民社会が生業活動を継続させるための取り組みをどのようにおこなっているかについて報告する。本稿でおもに扱うのは、アラスカ北部とカナダを伝統的テリトリーとするグィッチンの人々（とくにアラスカ側）とカリブーの関係であるが、必要に応じて他の先住民社会の事例も引き合いに出すこととする。

議論の流れとしては、まず、グィッチンの人々によるカリブーの狩猟方法について、過去と現在の比較を交えながら紹介する（第 2 章）。次に北極圏国立野生生物保護区（Arctic National Wildlife Refuge、以下、頭文字をとって ANWR と表記する）の 1002 地区で計画されている石油開発に対する反対運動を取り上げる（第 3 章）。グィッチンの人々は、ANWR における石油開発がカリブーの繁殖に深刻な影響を与えると考えており、みずからの文化的および物理的生存を守るために反対運動を組織してきた。第 4 章では、伝統的な狩猟方法であったカリブー柵の作り方を学び直すための取り組みに言及する。第 5 章では、アラスカ先住民社会における生業の再活性化を目指す動きを他にも紹介した上で、石油経済の到来前から続くヨーロッパ系アメリカ人との交渉を経て、生業を柔軟に再編成してきた、グィッチンの人々を含むアラスカ先住民が抱えるジレンマを取り上げる。詳しくは後述するが、そのジレンマとは、石油開発が自然環境に深刻な被害を与える可能性が潜在的に続く一方で、現在の状況下において、石油経済とまったく関わりをもたずに生業活動を継続するのは 不可能とは言わないまでもかなり難しいことだ。結論部では、このようなジレンマを抱えながら、ポスト石油時代、むしろポスト白人時代に備えるように説く先住民社会は、アラスカの石油経済が潰える日が来る可能性に思いをめぐらし、次世代に狩猟や漁撈の技術を伝えることで、その後の世界での生き残りを目論んでいると主張する。

本稿で紹介する民族誌データは、文献調査および著者の現地調査で得られたものである。著者は、2012 年から 2017 年にかけて、グィッチンの集落であるアークティックビレッジとビーバー村で短期調査をこれまで 4 回おこなっている（図-1）。また、本稿では、グィッチン以外にもコユコン、ディチナニク、イヌピアットに言及するが、前二者はグィッチンと同じく北方アサバスカ諸語を話す集団であり、近縁と言える。イヌピアットは異なった語族に属する。



図-1　調査地の位置（出典は文献 1）

近藤祉秋（北海道大学）
Email: shiaki.kondo@gmail.com

２．カリブー猟の今昔

グィッチンの人々は、カリブー、ヘラジカ、水鳥、毛皮獣などの狩猟、サケ類、ホワイトフィッシュを対象とした漁撈を通じて生活に必要な資源を獲得してきたが、現在では、生業活動をおこなう上で現金収入が必要不可欠なものとなっている[2]。というのも、現在の生業活動においては、モーターボート、スノーモービル、バギーが移動手段として利用されるが、これらを購入するのにも、燃料となるガソリンを買うのにも現金が必要となる。狩猟具に関しても同様のことが言える。ヨーロッパ系入植者との交渉が本格化する以前には、弓矢、槍、銛、ダガー、漁網が自製されていた[3),4)]が、今ではライフルや散弾銃、鋼鉄製の罠を利用するのが一般的であり、これらの狩猟具や薬莢、散弾を買うのに現金を入手しなければならない。北方狩猟民社会を取り巻くこのような現代的な生活状況は、「混合経済」と呼ばれてきた。これは文化人類学的な用法であり、自給自足的な自然経済と貨幣をともなう現金経済が相互補完的に混じり合っているという意味合いである。経済学における「混合経済」（計画経済と市場経済の混合）ではない。

ここからはカリブーの狩猟方法の変化について紹介する。20 世紀初頭にライフルがカリブーを狩る際の主要な狩猟具となる前には、カリブー柵を用いた集団追い込み猟がもっとも効果的な狩猟方法であった。繰り返し使うことを想定された本格的なものの場合、 カリブーの動きを誘導するための柵が数キロにわたって丘の中腹に続き、後半部が狭くなっていく漏斗状（V 字）の形をしていた。狩猟の参加者はカリブーの群れに密かに近づき、オオカミのような叫び声を上げたり、近くで火を起こしたりすることでカリブーを驚かせ、柵のあるところまで誘導した。カリブーが狭くなっている箇所に入ると、人々が入り口のところに立ち、カリブーが戻れないようにする。狭くなっている箇所には、獣皮で作られたくくり罠が数多く仕掛けてあった。首や角、鼻などに罠が引っかかって、カリブーが動けなくなると、付近で隠れていた狩猟者が槍や弓矢で仕留める[5]。

カリブー柵には、それぞれ所有者が決められていた。本格的なカリブー柵を作るときには 40〜50 名の助手が必要であったという記録もあり、本格的なものは数家族、簡単なものはひとつの家族で管理・利用されていた。追い込み猟で手に入れたカリブー肉は狩猟に貢献した者たちに分配された[5]。

グィッチンによるカリブー柵の利用は、20 世紀初頭には下火になっていった。おもな原因はヨーロッパ系の交易商が持ちこんだライフルを使った狩猟が一般的になったことであるが、カリブー柵が衰退する時期には地域差が見られる。アラスカ側にすむグィッチンの人々の間では、一般的には 20 世紀の初めごろにはカリブー柵が利用されなくなったとされるが、1920 年代のカナダ側のグィッチン集落では、薬莢の持ち合わせがなくなった若いグィッチンの狩猟者や老人がカリブー柵を使っていたという記録がある[5]。

ヨーロッパ系入植者との交易が盛んになると、グィッチンの人々は、銃、鋼鉄製の罠、鉄製製品（斧、調理具など）と引き換えに毛皮を提供するようになる。ピール川流域（カナダ・ユーコン準州）のグィッチン社会を調査したリチャード・スロボディンは、1940 年代後半の冬期罠猟パーティにおいて、数家族（25 名）からなる罠猟集団が食料確保のためにカリブーやヘラジカの狩猟も並行しておこなっていることを指摘した[6]。カリブーの場合、二手に分かれた狩猟集団が狭い谷間にカリブーの群れを追い込んだ後、ライフルを用いて捕獲した。この事例は、混合経済化が進んでいくグィッチン社会においても、過渡期的な状況のなかで、カリブー柵を用いない集団猟が行われていたことを示している。現在のカリブー猟が少人数でおこなわれることを考えると、興味深い事例と言える。

著者は 2012 年 8 月にアークティックビレッジ（米国アラスカ州）のグィッチン狩猟者 K 氏と彼の家族（妻・次女）とともにカリブー猟に同行した。イヌ 2 匹も連れていたが、猟犬というよりも野営中の安全を確保するための番犬としての役割を果たしていた。村から猟場までは四輪バギーを移動手段として、数時間の道程である。猟場は森林地帯を抜けた先にある丘であった。キャンプは森林地帯と丘の間にある地点に設けた（図-2）。



図-2　キャンプの様子（2012 年 8 月著者撮影）

翌日からホッキョクジリスの罠猟が始まる。K 氏と私はトラバサミを 20 個ほど背負い、ジリスの巣穴を見つけると穴の入り口にトラバサミを設置していった。冬眠の準備に忙しいジリスが巣穴から出入りする際にトラバサミに足をつかまれ、動けなくなる。止め刺しのやり方は棒で鼻先を殴って気絶させた後、心臓のあたりを探って、手で外側から心臓の動脈を引き抜くというものだ。このジリスは解体され、スープとなった。キャンプの間の食料源である。

3 日目、ジリスの罠を見回っているとき、カリブーの姿が見えた。15 頭ほどの群れが丘の稜線に沿って、歩みを進め、次第に丘の反対側に向かって行く。K 氏はライフルを持って、丘を登っていき、丘の頂上付近で発砲した。丘の反対側には湖があったのだが、その辺りで 3 頭のカリブーを捕獲した。解体の途中、間食として足の骨髄と腱を生で食した。カリブーの肉は四輪バギーを使って、キャンプまで降ろした（図-3）。



図-3　カリブーの肉塊（2012 年 8 月著者撮影）

過去と現在におけるカリブー猟のやり方を比較すると、集団猟がおこなわれなくなり、個人もしくは少人数での銃猟の比重が高くなったと言える。なお、弓矢を使っていた時期およびライフルが導入された初期の時期にも、個人猟はおこなわれていた。その場合、カリブーの毛皮で作った衣服を身にまとった狩猟者がカリブーの蹄が立てる音を真似する骨製もしくは木製の道具を使いながら、射程範囲に入るまで近づいていったと言われている [3]。現在では、ライフルの性能が上がり、遠くから狙うこともできるし、バギーで肉の運搬も容易になった。また、肉の分配は今でも重要なこととして見なされているが、冷凍庫があるので、伝統的なやり方である薫製による干し肉作りよりも簡単に保存ができる。これらの要素が重なりあって、集団猟から個人猟へのシフトが生じていると考えられる。

３．石油開発への反対運動

アラスカの現代史を語る上で石油開発を欠かすことはできない。1968 年、アラスカ北部のプルドー湾で石油が発見されると、石油の採掘とパイプラインの敷設のため、当時まだ曖昧なままになっていたアラスカ先住民の土地権を明確にする必要性が高まった。連邦政府、州政府、おもだった先住民の政治的リーダーが会合を重ねた末、1971 年にアラスカ先住民権益請求処理法（Alaska Native Claims Settlement Act）が制定された。この法律により、アラスカ先住民は、伝統的な民族分布に則った 12（＋１）の地域会社とその傘下にある 200 強の村会社に分かれ、各自の所属会社が発行する一定量の株式を保有することとなった。地域会社と村会社が補償金の受け皿となり、会社の経営により上げた利益は、配当金として株式保有者に配分される。なお、アラスカ先住民会社に配分された土地のうち、土地の表層部にあたる部分については村会社が権利をもち、地下に関しては地域会社が権利をもつとされた。1970 年代には石油の生産が始まり、税収はアラスカ州全体を潤すこととなった。

グイッチンの人々にとっての転機は、1988 年に訪れた。北方圏国立野生生物保護区（ANWR）の 1002 地区で石油および天然ガスの開発計画が発表されたのだ。この場所は、グィッチンの人々が重要視するポーキュパイン・カリブー群の繁殖地であり、その地域で石油開発がおこなわれることでカリブー群の繁殖に深刻な影響が出る可能性が懸念された。ANWR は自然保護活動家にとっても保全の価値があるとされている地域であるため、グィッチンの人々は自然保護活動家と協働しながら、国際的にも広く知られる反対運動を組織してきた [2]。最近では、北極域の気候変動が世界共通の課題として見なされるなかで、石油開発反対運動の中心となる「グィッチン運営委員会」が「気候正義」（climate justice）を運動に取り入れていることも注目を集めている [7]。

この問題が複雑になるのは、カリブー群が移動する距離が膨大であり、グィッチンの人々がカリブーを狩る場所（内陸）とカリブーの繁殖地（沿岸）との間にはかなりの距離があることだ。ANWR の 1002 地区にもっとも近い集落はカクトヴィクであり、この地域はグィッチンとは別の民族であるイヌピアットの伝統的テリトリーである。クジラやアザラシなどの海獣狩猟に文化的に高い価値を与えているイヌピアットの間では、陸上でおこなわれる ANWR の開発案とは別に計画されている海底油田の開発に関して、捕鯨者を中心に反対の声が根強い [8]。だが、そのかわりイヌピアットは ANWR のような陸上の石油開発であれば許容的であるという見方をする論者もいる [9),10)]。

現在でも ANWR の石油開発をめぐる問題は継続中である。とりわけ民主党のバラック・オバマ前大統領は ANWR の石油開発に反対する立場を示しており、グィッチンの人々の間でも彼の姿勢を評価する動きがあった。しかし、2017 年 1 月、エネルギー開発に積極的な姿勢を見せている、共和党のドナルド・トランプ氏が大統領に就任した。彼は、ノースダコタ州の先住民が強い反対を示していたダコタ・アクセス・パイプラインの工事再開を就任後すぐに指示した。アラスカ先住民の人々にとっても、ダコタ・アクセス・パイプラインをめぐる一連の反対運動は無視できないものであったらしく、2016 年から 2017 年にかけて、アラスカ

先住民の知人の間でもインターネット上を中心に反対運動の様子が熱心に情報共有されていた。

2017年5月には、「グィッチン運営委員会」有志および環境保全運動家が合衆国南西部のネヴァダ州とユタ州を訪れ、各地で講演会や現地先住民コミュニティとの交流をおこなっている。この取り組みは、トランプ政権における反・環境主義的な動きに対応して、地域間での連帯を醸成することを目指したものであると言える[11]。

2017年9月の新聞報道によれば、すでに予見されていることではあったが、トランプ政権はANWR内の石油埋蔵予想量を調べるために新規の調査に対する制限を解除する方針であることがわかった[12]。反対派は、そのような調査自体が環境に与えるインパクトが大きいことを指摘している。現在の原油価格を考慮すると、調査に対する制限が解除された場合でも、原油生産にむけた調査がすぐさま始まるかどうかは不透明であるが、反対派の巻き返しにむけた動きはこれから強まるものと予想される。

4. カリブー柵の復興

グィッチンの人々がANWR内の石油開発にここまで強く反対するのは、彼らが自身を「カリブーの民」として捉えているからだ。井上敏昭によれば、石油開発への反対運動の集会でも以下のような神話的な言説が述べられていたという[2]。「『すべての生き物が同じ言葉をしゃべっていたころ』カリブーとグィッチンは同じ民だった。それぞれが違った道に分かれたあとにも、カリブーはグィッチンの心をもち続け、グィッチンはカリブーの心をもちつづけた」。

グィッチンの人々はANWRを「聖地」と表現する。上述したように、彼らはカリブーやそれを支える大地との間に「霊的」とも呼びうるようなつながりを感じている。私がK氏とカリブー猟に出かけたときにも、カリブーや大地とのつながりを実感するできごとがあった。K氏の家族と私がキャンプをした場所では、毎晩、オーロラが見えた。この時期には、白夜の名残で午後11時頃からオーロラが見えるようになったと記憶する。丘の頂上の上空でエメラルドブルーと紫紺の光がたなびき始めると、K氏の家族たちはその行き先を見守る。オーロラは先祖たちが踊りをしている姿であると考えられており、それを見ている人間の言動によって動きを左右させると考えられている。K氏いわく、オーロラはカリブーの居場所を教えてくれることがあり、明日はその方角に行ってみるつもりだという。

K氏がそう語った翌日、実際にカリブーがやってきたのであるが、狩猟に成功した後にもカリブーとの関係は続く。解体した後の肉を夜露や雨から守るため、私たちはブルーシートを上にかぶせようとしていた。K氏は、以前の狩猟者が残していった白骨化したカリブーの頭骨を拾い上げて、重しとして利用した。その翌日から、天気が悪くなり雨が降り出したのを見たK氏は、白骨化したカリブーの頭骨を拾い上げるべきではなかったと述べた。以前、祖父から猟場に置いてあるカリブーの頭骨に触ってはいけないと言われていたが、そのタブーを破ったことが雨をもたらしたのだという。

これらの事例からわかることは、カリブー猟が単なる食料獲得活動というだけではないことだ。むしろ、グィッチンの生存に欠かせないものであるからこそ、カリブー猟はさまざまな神話的言説や禁忌とも結びつく。カリブーがいなくなってしまえば、グィッチンは大地とのつながりを失ってしまう。そして、大地とのつながりを喪失することは、その上で生きてきた先祖とのつながりをないがしろにしてしまうことになる。カリブーがいなければ、グィッチンは丘の上で寝泊まりすることもなくなるであろう。オーロラは村のなかでも見えるかもしれないが、先祖が踊る姿に目を向け、メッセージを読み取ろうとする理由は半減してしまう。

このような文脈を理解してはじめて、グィッチンの人々が伝統的な狩猟で用いられてきたカリブー柵の復興に取り組む理由が理解できる。2015年8月6日付けの『ニュースマイナー』紙オンライン版が報じるところによれば、グィッチンの人々はその夏にカリブー柵復興プロジェクトのための助成金を獲得した。アークティックビレッジの有志が労働力を提供して、現存する柵や古老の記憶を頼りにカリブー柵が再現された[13]。カリブー柵は、太古の昔から続くグィッチンとカリブーのつながりを象徴するものであり、それを再建しようとする試みはカリブーとのつながりを未来にむけて維持しようとする決意の現れであるとも言える。

5. 石油時代のアラスカ先住民社会

ここまで過去と現在におけるグィッチンとカリブーの関係について報告してきた。最後に、これまでの論点を統合しながら、石油時代のアラスカ先住民社会について考察していきたい。

現在のアラスカ先住民の生業は、石油経済のもとで大きなジレンマを抱えている。石油開発が自然環境に深刻な被害を与える可能性が潜在的に続く一方で、現在の状況下において生業活動を継続する上では石油経済とうまくつき合わなければならない。バギーやモーターボート、スノーモービルを動かすためには原油から精製されるガソリンが必要であり、現在の生業活動はこれらの機械なしには成りたたない。これはK氏とおもむいたカリブー猟でも同様であった。また、 開発業者が地元の雇用を実質的に優先する方策を実施する場合、現金収入を得る方法が限られている村にすむ先住民の人々にとって、石油開発は貴重な収入源ともなり得る。

このジレンマは究極的には混合経済が生み出したもので

あると言える。自給自足の経済においては、獲物の再生産を確実にすることが最優先の目標となる。だが、アラスカ先住民が片足を踏み入れている現金経済において、地下資源がもたらす莫大な利益は州政府や経済界の注目を浴びており、税収が増えれば短期的には村の経済状況も好転すると考えられる。現代のアラスカ先住民は、両者を天秤にかけながら、それぞれの集団がみずからの進む道を決めてきた。グィッチンにとって、それは石油開発への反対運動という形をとった。

こうした状況の中で、アラスカ先住民の村々では、生業の再活性化を試みる取り組みが広くおこなわれているのは興味深い。前章では、カリブー柵を再現する取り組みに言及したが、アークティックビレッジから200キロメートルほど南にあるグィッチン集落ビーバー村でも「文化キャンプ」が開催されている。2017年の例では、ビーバー村のある古老がよく使っている漁撈キャンプ（図-4）を会場として、6月～7月の4週間にかけて地元の子供たちとアラスカ大学生がグィッチンの文化について古老から学んだ。



図-4　漁撈キャンプ（2017年8月著者撮影）

著者が注目するのは、文化を学び直す活動をおこなう理由として、「いずれ昔のような『白人の食べもの』がない生活に戻るときがやってくる」という予言めいた表現が時に使われることだ。まだ著者はグィッチンの人々からこの表現を直接聞いたことはないが、同じく北方アサバスカ諸語に含まれるコユコンやディチナニク（クスコクィム川上流域）の人々からこのような表現を聞いたことがある。

著者がアラスカ大学に在学していたときにクラスメイトであったあるコユコン女性は、彼女の老母がよく「世の中は近い将来またシンプルになる」と語っていたという。著者の友人はフェアバンクスのダウンタウンでブティックを経営しているが、母親の言葉を信じて「文化を学ぶことはゲームの一手先を行くことである」と語る。彼女が近所で開催されるポトラッチの手伝いに行き、夏にはベリー摘みに行くのにはこうした理由がある。また、アークティックビレッジから南西に700キロメートルほど離れたところにあるニコライ村でも、あるディチナニクの古老は捕魚車（日本では「インディアン水車」と呼ばれるがもともとはアメリカ人が持ち込んだものである）の作り方を子どもたちに教えるワークショップをおこなう理由としてこの考え方を挙げた。彼いわく「生き残る方法を知っていなければならなかった昔のような日々が戻って来るだろう」[14]。

生業の再活性化を目指す取り組みは、将来的に過去回帰の状況が生じたときのための対策として位置付けられているが、実際には、モーターボートやライフルなど非先住民社会との接触以前には先住民文化のなかにはなかったもの（＝自給自足的な過去の生活にはなかったもの）が利用されている。意地悪な見方をすれば、これは混合経済に生きざるを得ないなかで混合経済の終焉を考えることのジレンマから生じる矛盾とも言えるが、取り組みに参加する人々はとくにそこを矛盾とは捉えていない。

実際のところ、子どもたちが「文化キャンプ」で学ぶ、狩猟・漁撈の技術、解体法、野生生物の生態は、完全に自給自足的な「昔ながらの生活」においても十分役に立つだろうし、生業の再活性化を目指す取り組みでは、以前にはよく利用されていたが、今ではあまり人が利用しなくなった土地が会場となることが多い。その意味で、「文化キャンプ」はすでに「昔ながらの生活」の防災訓練的な再来であるとも言える。

アークティックビレッジにすむグィッチンの人々がカリブー柵の復興をしたとき、「過去回帰」の考え方を念頭においていたかどうかは定かではない。しかし、内陸アラスカ先住民社会で語り継がれる「過去回帰」の言説は、石油開発への反対運動に見られるグィッチンの姿勢とも共通する考え方を感じさせる。つまり、徹底的に対抗するか、表面上は石油経済に飲み込まれたふりをする（＝「文化キャンプ」に行くためにガソリンを燃やしてボートに乗る必要がある）かの違いはあるが、どちらとも決定的な瞬間において「白人のやり方」を信用せず、野生生物との絆を生存の立脚点として捉えている。これは彼らの歴史を考えれば当然のことであるとも言える。内陸アラスカにおいて、「白人」との交渉はたかだか150～200年ほど前に始まったことである。少なくとも数千年の単位で続いてきた野生生物とのつながりと比べて、いかにも皮相的である。むしろ、これまで「白人」がもたらしたものの多くは、疫病から食べもの（ジャンクフード）まで、ろくなものではなかったという彼らの歴史意識を鑑みれば「白人のやり方」に依存しすぎることを疎う方が自然であるとも言える。

アラスカ先住民の人々は、石油経済と正面きってぶつかったり、それをうまく乗りこなしたりしながら、生存の立脚点である野生生物との絆を忘れない。石油経済や産業

が悪いとやみくもに言っているのではない。経済的な理由から、石油開発を求めるアラスカ州民も数多くいる。ただ、石油時代のアラスカにおいて、ポスト石油時代を見据えて狩猟と漁撈の腕を磨く先住民のあり方から著者は多くを学んできたことは強調しておきたい。北極域の資源開発に経済界の注目が集まるなか、「自給自足の生活に戻る日が来る」などと言うと、戯言のように聞こえるかもしれない。でも、それが「ゲームの一手先を行くことになるかもしれない」。

謝辞

本稿は、既出版のエッセイ [1]をもとにしながら、大幅に加筆・修正したものである。また、本稿は北極域研究共同推進拠点（J-ARC Net）平成 29 年度・共同推進研究「北極域における人新世の生業システム」の成果の一部である。本稿の執筆にあたって、グィッチン狩猟者の K 氏をはじめとするアラスカ先住民の友人知人から多大なる協力を得た。記して謝意を表したい。なお、本稿で示された見解は、著者本人のものであり、所属機関の公式見解を示すものではありません。

参考文献

1)　近藤祉秋（2017）「カリブーのキャラバン：アラスカ・グィッチンの狩猟と文化復興」『Arctic Circle』102 号、pp. 4-9。

2)　井上敏昭（2007）「『我々はカリブーの民である』：アラスカ・カナダ先住民のアイデンティティと開発運動」煎本孝・山田孝子（共編）『北の民の人類学：強国に生きる民族性と帰属性』京都大学学術出版会、pp. 95−122。

3）O'Brien, Thomas A.(2011) *Gwich'in Athabascan Implements: History, Manufacture, and Usage According to Reverend David Salmon*. University of Alaska Press.

4)　野口泰弥・近藤祉秋（2017）「狩猟具にやどる威信：18 世紀末〜20 世紀前半におけるアサバスカン社会のナイフ使用について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第 26 号、pp.　1−30。

5）Warbelow, Cyndie, David Roseneau, and Peter Stern (1975) "The Kutchin Caribou Fences of Northeastern Alaska and the Northen Yukon." Studies of Large Mammals along the Proposed Mackenzie Valley Gas Pipeline Route from Alaska to British Columbia. Biological Report Series, Vol. 32.

6）Slobodin, Richard (1962) *Band Organization of the Peel River Kutchin*. Department of Northern Affiars and National Resources, Canada.

7) Graybeal, Pam M. (2005) "Framing and Identity in the Gwich'in Campaign against Oil Development in the Arctic National Wildlife Refuge." Breslauer Symposium Series. http://escholarship.org/uc/item/2m42j5g6（公開日：2005 年 12 月 1 日、最終確認日：2017 年 10 月 19 日）.

8)　岸上伸啓（2014）『クジラとともに生きる：アラスカ先住民の現在』臨川書店。

9)　Welch, Craig (2015) "Why Alaska's Inupiat Are Warming to Offshore Oil Drilling." *National Geographic* (online) http://news.nationalgeographic.com/2015/05/150522-Inupiat-Shell-offshore-oil-Arctic-Alaska-ocean-whale- sea.html（公開日：2015 年 5 月 22 日、最終確認日：2017 年 10 月 19 日）.

10）Kentch, Gavin (2012) A Corporate Culture? The Environmental Justice Challenges of the Alaska Native Claims Settlement Act. *Mississippi Law Journal* Vol. 81-4, pp. 813-841.

11）Gwich'in Steering Committee (2017) "The Tour Head to Utah" http://ourarcticrefuge.org/the-tour-heads-to-utah/（公開日：2017 年 5 月 29 日、最終確認日：2017 年 10 月 19 日）.

12) Friedman, Lisa (2017)　"Trump Administration Moves to Open Arctic Refuge for Drilling Studies." New York Times https://www.nytimes.com/2017/09/16/climate/trump-arctic-refuge-drilling.html　（公開日：2017 年 9 月 16 日、最終確認日：2017 年　10 月 19 日）.

13) Friedman, Sam (2015) Tradition Revived: Group builds Gwich'in Athabascan caribou fence. News Miner (online) http://www.newsminer.com/features/outdoors/group-builds-gwich-in-athabascan-caribou-fence/article_2eff0324-3caa-11e5-adbd-471cb74055ed.html（公開日：2015 年 8 月 6 日、最終確認日：2017 年 10 月 19 日）.

14)　近藤祉秋（2016）「狩猟・漁撈教育と過去回帰：内陸アラスカにおける生業の再活性化運動」シンジルト・奥野克巳（共編）『動物殺しの民族誌』昭和堂、pp. 293-326。